

接続法の動詞形における 主観性と客観性の弱化

川 島 浩 一 郎*

1. はじめに

いわゆる接続法の動詞形を使用することが、規範となっている文脈がある。たとえば(1)や(2)の従属節においては、接続法の動詞形を使用することが規範である。接続法の動詞形には、接続法現在形、接続法過去形、接続法半過去形そして接続法大過去形がある。

- (1) Il faut que vous *fassiez* quelque chose. (Nicole de Buron, *Vas-y maman*, Collection J'ai lu, 1978, p.23)
- (2) Quoi que vous *fassiez*, soyez discret. (Tonino Benacquista, *Quelqu'un d'autre*, Collection Folio, 2002, p.150)
- (3) Oh bien sûr, il y *aurait* une solution... (Philippe Djian, *37°2 le matin*, Collection J'ai lu, 1985, p.125)
- (4) En face de la poste, il y *a* un bar. (Anna Gavalda, *Je voudrais que quelqu'un m'attende quelque part*, Collection J'ai lu, 1999, p.144)

主観と客観の弁別が、言語表現として現れることがある。主観という用語は、大略、個人的な(複数の個人による共有を前提としない)判断や認識を表す。客観という用語は、大略、複数の個人による共有を前提とした判断や認識を表

* 福岡大学人文学部教授

す。たとえば (3) の *il y aurait une solution* では、*aaurait* という動詞形によって、この発話が話者の主観にもとづくことが表現されている。他方 (4) の *il y a un bar* では、*a* という動詞形によって、この発話が客観に立脚していることが表現されている。

接続法の動詞形の使用が規範の動詞形においては、主観性と客観性が弱化する。動詞形に、モダリティを表現するような表意単位の実現形が含まれないからである。モダリティは、主観性を表現する手段のひとつである。よってモダリティを表す表意単位を活用できない動詞形では、主観性が弱化すると考えられる¹。このような動詞形では、主観と客観の弁別も弱化する。したがって、客観性も弱化すると言ってよい。たとえば (1) と (2) の *fassiez* は、実際、主観性を表すために選ばれた動詞形でもなければ、客観性を表すために選ばれた動詞形でもない。本稿ではとくに、このことを示す。

2. 接続法の動詞形におけるモダリティを表す表意単位（記号素）の不在

2.1 表意単位あるいは記号素の実現形として認定するための必要条件

2.1.1 表意単位の実現形として認定するための必要条件

二重分節構造において第一次分節の構成要素として抽出される単位を、表意単位と呼ぶ。それが、発話の意味の変化に関与する（つまり表意機能を担う）単位だからである。また最小の（つまり内部に複数の表意単位を含まない）表意単位は、記号素と呼ばれる²。たとえば (5) は、二つの記号素に分節されている。ひとつは、*moi* という形で実現している表意単位である³。もうひとつは、

¹ 教科書や文法書では、接続法の動詞形の使用を、話者の主観という概念を用いて説明することが少なくない。

² 表意単位には、記号素と連辞がある。記号素は、形態素とも呼ばれる。連辞は、複数の記号素の複合体（つまり非最小の表意単位）である。

³ 表意単位は、抽象的な存在である。本稿では「表意単位」と「表意単位の実現形」を

pas という形で実現している表意単位である。これらは、どちらも最小の表意単位である。

(5) *Moi pas.* (Patrice Leconte, *Les Femmes aux cheveux courts*,
Collection Le Livre de Poche, 2009, p.38)

発話のある切片が表意単位の実現形であるためには、その切片を他の切片（ゼロ切片でもよい）と入れ換えることによって、知的意味にもとづいた弁別が発話に生じることが必要である。表意単位は、表意機能を担う（つまり、第一次分節の構成要素として発話の意味の変化に関与する）単位だからである。ゼロ切片という用語は、切片が不在の状態を意味する。知的意味という用語は、大略、言語共同体において共有される客観的、離散的な弁別にもとづく意味のことを指す。

条件 (I) 発話の一部において、その切片を他の切片（ゼロ切片でもよい）と入れ換えることができる。

条件 (II) この入れ換えによって、知的意味にもとづいた弁別が発話に生じる。

条件 (I) および条件 (II) は、発話のある切片が表意単位の実現形であるための必要条件である。たとえば (6) にみられるように、*je ne sais pas* の *pas* と *je ne sais plus* の *plus* は、互いに入れ換えることができる。つまり *pas* と *plus* が、条件 (I) をみたす。また *pas* と *plus* の入れ換えによって、*je ne sais pas* や *je ne sais plus* の意味に客観的、離散的な弁別が生じる。つまり *pas* と *plus* が、条件 (II) をみたす。したがって *pas* と *plus* はそれぞれ、少なくとも *je ne sais ...* という文脈において、表意単位の実現形であるための必要条件をみたしていると言ってよい。

(6) *Je ne sais pas... je ne sais plus.* (Guillaume Musso, *Sauve-moi*,

できるだけ区別して記述する。

Collection Pocket, 2005, p.313)

(7) Je ne *le* sais pas. (Fred Vargas, *Les jeux de l'amour et de la mort*, Édition du Masque, 1986, p.94)

(8) [...] : je ne *le* suis pas. (Françoise Dorin, *La rêve-party*, Collection Pocket, 2002, p.164)

いわゆるゼロ切片も、入れ換えの可能性が検証の対象となる切片である。たとえば (6) の *je ne sais pas* と (7) の *je ne le sais pas* にみられるように、*je ne le sais pas* における *le* はゼロ切片（切片が不在の状態）と入れ換えることができる。この入れ換えは *je ne le sais pas* に、知的意味にもとづいた弁別を生じさせる。よって *je ne le sais pas* における *le* は、表意単位の実現形としての必要条件をみたすと言うことができる。

ただし、条件 (I) および条件 (II) をみたす発話の切片が、表意単位の実現形であるとはかぎらない。たとえば (7) と (8) にみられるように、*je ne le sais pas* の *sais* における *-ais* と *je ne le suis pas* の *suis* における *-uis* は、互いに入れ換えることができる。また、この入れ換えによって、*je ne le sais pas* あるいは *je ne le suis pas* に、知的意味にもとづいた弁別が生じる。よって、これらの *-ais* と *-uis* は、条件 (I) と条件 (II) をみたすことになる。しかし *sais* における *-ais* や *suis* における *-uis* が、表意単位の実現形でないことは明らかである⁴。発話のある切片が条件 (I) および条件 (II) をみたすことは、その切片が表意単位の実現形であることの必要条件ではあっても、十分条件ではない。

2.1.2 記号素の実現形として認定するための必要条件

次の条件 (I) と条件 (II) は、発話のある切片が表意単位の実現形である

⁴ 間接的には、*sais* や *suis* の冒頭の [s] が表意単位の実現形でないためでもある。

ための必要条件であると言ってよい。条件 (I) 発話の一部分において、その切片を他の切片（ゼロ切片でもよい）と入れ換えることができる。条件 (II) この入れ換えによって、知的意味にもとづいた弁別が発話に生じる。これらの条件は、必要条件ではあっても、十分条件ではない（2.1.1 を参照）。

(9) Je ne sais *pas*. (Amélie Nothomb, *Cosmétique de l'ennemi*, Collection Le Livre de Poche, 2001, p.96)

よって発話の切片がその内部に、条件 (I) と条件 (II) をみたます切片をひとつもち、かつひとつ（その切片の全体）しかもたないとき、その切片は記号素の実現形としての必要条件をみたます。記号素は、それ以上小さな表意単位に分割することができない表意単位だからである。つまり記号素の実現形の内部において条件 (I) と条件 (II) をみたます切片は、その記号素の実現形の全体だけしかない。たとえば (9) の *pas* の内部にあって、かつ条件 (I) と条件 (II) をみたます切片は、この *pas* の全体しかない（2.1.1 を参照）。よって (9) の *pas* は、記号素の実現形であるための必要条件をみたますと言ってよい。

2.1.3 必要条件としての必然性

発話のある切片を、他の切片（ゼロ切片でもよい）と入れ換えることができない場合、その切片を表意単位の実現形として認定することはできない。たとえば (10) の *repas* における *-pas* を、他の切片（ゼロ切片でもよい）と入れ換えることができないとしてみよう。この場合の *-pas* は、いわば *re-* と一体化して分離することが不可能である。このように他の切片から分離できない切片を、表意単位の実現形として認定することはできない。それは表意単位の実現形ではなく、記号素の実現形の一部分にすぎないからである（2.1.2 を参照）。

(10) [...], il décida de s'offrir un vrai *repas*. (Thierry Jonquet, *Mon vieux*, Collection Points, 2004, p.28)

発話のある切片を他の切片（ゼロ切片でもよい）と入れ換えることによって、

知的意味にもとづいた弁別が発話に生じない場合、その切片を表意単位の実現形として認定することはできない。実際 *repas* における *-pas* を、どのような切片（たとえば *-gard* であろうが *-gret* であろうが *-volver* であろうが）と入れ換えても知的意味にもとづいた弁別が発話に生じない文脈がもしあるとすれば、それは表意機能そのものが働かえない文脈であると考えざるをえない。表意機能が働かえない文脈に現れた切片を、表意単位の実現形とみなすことはできない。

したがって、発話のある切片が次の二条件をみたさないとき、その切片を表意単位の実現形とみなすことはできないと言ってよい。条件 (I) 発話の一部分において、その切片を他の切片（ゼロ切片でもよい）と入れ換えることができる。条件 (II) この入れ換えによって、知的意味にもとづいた弁別が発話に生じる。これらの条件が、発話のある切片が表意単位の実現形であるための必要条件だからである（2.1.1 を参照）。

2.2 接続法の動詞形とモダリティを表す表意単位不在の動詞形

2.2.1 接続法的動詞形

動詞形として、いわゆる接続法の動詞形を使用することが規範となっている文脈がある。たとえば (11) の従属節中では、*dises* のような接続法の動詞形を用いることが規範である。同様に (12) の従属節中では、*meure* のような接続法の動詞形を用いることが規範とされる。

(11) Il faut que tu *dises* quelque chose. (Guillaume Musso, *Que serais-je sans toi ?*, Collection Pocket, 2009, p.144)

(12) Elle veut que je *meure*. (Brigitte Aubert, *Transfixions*, Collection Points, 1998, p.204)

(13) Il faut que tu *travailles*. (Françoise Sagan, *Aimez-vous Brahms...*, Collection Pocket, 1959, p.101)

- (14) Ma mère veut que je me *marie* ! (Martine Dugowson, *Mina Tannenbaum*, Collection Le Livre de Poche, 1994, p.88)

接続法の動詞形の使用が規範とされる文脈に現れた動詞形を「接続法的動詞形」と総称することにしよう。たとえば (11) の *dises* や (13) の *travailles* を、直説法の動詞形との異同にかかわらず、いずれも接続法的動詞形と呼ぶこととする。同じく (12) の *meure* や (14) の *marie* も、等しく接続法的動詞形と呼ぶことにする。これらが現れた文脈が、接続法の動詞形の使用が規範とされる文脈だからである。接続法の動詞形の使用が規範とされる文脈に現れた動詞形であれば、それが接続法の動詞形でなくても、接続法的動詞形と呼んでかまわない。接続法的動詞形という用語は、動詞形の形そのものではなく、文脈的な制約にもとづいた概念である。

接続法的動詞形のうち、接続法現在形と呼ばれる動詞形を、とくに接続法的動詞形（接続法現在）と表記することにしよう。同様に、いわゆる接続法過去形を接続法的動詞形（接続法過去）と表記する。接続法半過去形は接続法的動詞形（接続法半過去）と表記し、接続法大過去形は接続法的動詞形（接続法大過去）と表記することとする。たとえば (11) の *dises* や (12) の *meure* は接続法的動詞形でもあり、同時に接続法的動詞形（接続法現在）でもある。他方 (13) の *travailles* や (14) の *marie* は、接続法的動詞形ではあるが、接続法的動詞形（接続法現在）であるのかそうでないのかは考え方にもよる。これらの動詞形においては、直説法現在の動詞形と接続法現在の動詞形が同形だからである。

2.2.2 モダリティとモダリティを表す表意単位（記号素）

発話の命題的内容に対する話者の判断が言語表現化されたとき、それをモダリティと呼ぶ。たとえば (15) には、モダリティが含まれる。(15) においては、*vous êtes architecte* によって表された命題的内容に対する話者の「確信の

弱さ」が, *c'est ça ?* によって表明されているからである⁵.

(15) Vous êtes architecte, *c'est ça ?* (Marc Levy, *Vous revoir*, Collection Pocket, 2005, p.211)

(16) Pourquoi il me *détesterait ?* Je lui ai rien fait... (Katherine Pancol, *Les yeux jaunes des crocodiles*, Collection Le Livre de Poche, 2006, p.495)

(17) Elle me *déteste*, je le sais. (Nicole de Buron, *Qui c'est, ce garçon ?*, Collection J'ai lu, 1985, p.192)

モダリティは、動詞記号素と共起する表意単位ないしは記号素の実現形として表現されることがある。たとえば (16) の *pourquoi il me détesterait ?* には、モダリティが含まれると言ってよい。この発話においては「彼は私を嫌っている」という命題的な内容に対して、話者の否定的な判断が表明されているからである。このモダリティは、表意単位あるいは記号素の実現形によって表現されていると考えられる。実際 (16) の *détesterait* に含まれ、かつ (17) の *déteste* に含まれない切片は、表意単位の実現形としての必要条件をみたす (2.1.1 を参照)。この切片は、(17) の *déteste* にみられるように、他の切片 (ゼロ切片でもよい) と入れ換えることができる。また、この入れ換えによって、知的意味にもとづいた弁別が発話に生じる。実際 (17) の *elle me déteste* においては、命題的内容に対する話者の否定的な判断は表明されていない。つまり (16) の *détesterait* には *déteste* に含まれない表意単位の実現形が含まれ、その実現形はモダリティを表現することのできる表意単位の実現形であるということになる。

⁵ 命題的内容という用語は、大略、文の意味からモダリティを除去した残りの部分を指す。

2.2.3 接続法現在の動詞形におけるモダリティを表す表意単位（記号素）の不在

接続法的動詞形を使用することは、モダリティを表現することではない。接続法的動詞形の使用は、この用語の定義として、文脈的な制約にもとづいているからである（2.2.1を参照）。文脈的な制約に従うことを、モダリティの表現であるとは言えない。モダリティは、話者による判断の表明だからである（2.2.2を参照）。

(18) Il faut que je *sorte*. (Sylvie Testud, *Gamines*, Collection Le Livre de Poche, 2006, p.208)

(19) Il faut que je *comprenne*. (Fred Vargas, *Un lieu incertain*, Collection J'ai lu, 2008, p.302)

接続法的動詞形に含まれる動詞記号素の実現形は、確かに、表意単位の実現形としての必要条件をみたく。たとえば（18）の *sorte* は、接続法的動詞形である。この *sorte* に含まれる動詞記号素の実現形は、（19）の *comprenne* にみられるように、他の動詞記号素の実現形と入れ換えることができる。また、この入れ換えによって知的意味にもとづいた弁別が発話に生じる（2.1.1を参照）。よって（18）の *sorte* には（19）の *comprenne* に含まれない表意単位の実現形が含まれ、その実現形は動詞記号素の実現形だということになる。

ただし動詞記号素の実現形の入れ換えは、モダリティの表現ではない。動詞記号素の実現形を入れ換えることによって変わるのは、命題的な内容である。この入れ換えによって、モダリティが生じるわけではない。つまり（18）の *sorte* に含まれる動詞記号素の実現形を（19）の *comprenne* に含まれる動詞記号素の実現形と入れ換えることによって変わるのは、従属節中の命題的な内容である。この入れ換えによって、*je sorte* や *je comprendne* にモダリティが生じるわけではない。

接続法的動詞形（接続法現在）を「それ以外の接続法的動詞形」と入れ換えても、その部分にモダリティは生じない。接続法的動詞形（接続法現在）とい

う用語は、接続法現在の動詞形を意味する (2.2.1 を参照)。当該の文脈では、接続法の動詞形の使用が規範である。この規範に反して (18) の *sorte* を「接続法の動詞形」以外の動詞形 (*sors* や *sortirais* など) と入れ換えたとしても、そこにモダリティが生じるわけではない。また接続法的動詞形(接続法現在)を、接続法的動詞形 (接続法過去), 接続法的動詞形 (接続法半過去) あるいは接続法的動詞形 (接続法大過去) と入れ換えても、そこにモダリティが生じるわけではない (2.2.4 を参照)。

したがって接続法的動詞形 (接続法現在) には、モダリティを表現する表意単位あるいは記号素の実現形は含まれないと考えてよい。接続法的動詞形 (接続法現在) には、モダリティを表現し、かつ表意単位の実現形としての必要条件をみたすような切片は含まれていないからである。動詞記号素の実現形の入れ換えは、モダリティの表現ではない。また接続法的動詞形 (接続法現在) を「それ以外の動詞形」と入れ換えても、そこにモダリティが生じるわけではない⁶。

2.2.4 接続法的動詞形におけるモダリティを表す表意単位 (記号素) の不在

接続法的動詞形 (接続法現在) に、モダリティを表現するような表意単位の実現形は含まれない。よって接続法的動詞形 (接続法現在) は、モダリティを表現するための動詞形ではない (2.2.3 を参照)。

接続法的動詞形という枠組みにおける接続法的動詞形 (接続法現在), 接続法的動詞形 (接続法過去), 接続法的動詞形 (接続法半過去), 接続法的動詞形 (接続法大過去) の間での動詞形の入れ換えは、モダリティの表現ではない。この入れ換えによって、モダリティは生じないからである。たとえば (20) における *ait fait* が *fasse* でないのは、そこに事態の完了が標示されているから

⁶ 詳細については、川島 (2017) を参照。

である。また (21) における *écrivît* が *écrive* でないのは、そこに過去時制が標示されているからである。これらの動詞形の交替は、モダリティを表現するためのものではない。

(20) Si Johnny n'a pas tué Maeva, il faut bien que quelqu'un *l'ait fait*.
(Brigitte Aubert, *Transfixions*, Collection Points, 1998, p.224)

(21) Il fallait donc qu'elle *écrivît* ! (Katherine Pancol, *Les yeux jaunes des crocodiles*, Collection Le Livre de Poche, 2006, p.283)

したがって接続法的動詞形 (接続法過去), 接続法的動詞形 (接続法半過去), 接続法的動詞形 (接続法大過去) には、モダリティを表現する表意単位の実現形は含まれないと言ってよい。接続法的動詞形 (接続法過去), 接続法的動詞形 (接続法半過去), 接続法的動詞形 (接続法大過去) に、モダリティを表現する表意単位の実現形が含まれていると仮定してみよう。この仮定によれば、接続法的動詞形 (接続法現在) をこれらの動詞形と入れ換えることによって、そこにモダリティが生じるはずである。しかし現実には、接続法的動詞形 (接続法現在), 接続法的動詞形 (接続法過去), 接続法的動詞形 (接続法半過去), 接続法的動詞形 (接続法大過去) の間での動詞形の入れ換えによって、モダリティが生じるわけではない。これは、矛盾である。よって、接続法的動詞形 (接続法過去), 接続法的動詞形 (接続法半過去), 接続法的動詞形 (接続法大過去) にモダリティを表現する表意単位の実現形が含まれているとした仮定が、間違っていると考えざるをえない。

以上の考察から、すべての接続法的動詞形には、モダリティを表現するような表意単位の実現形は含まれないという結論が導かれる。実際、接続法的動詞形 (接続法現在), 接続法的動詞形 (接続法過去), 接続法的動詞形 (接続法半過去), 接続法的動詞形 (接続法大過去) には、モダリティを表現するような表意単位の実現形は含まれない。したがって、すべての接続法的動詞形が共有できるような「モダリティを表す表意単位の実現形」は存在しないと言ってよい。

3. 接続法的動詞形における主観と客観の弁別の弱化

3.1 主観と客観の弁別

主観という用語は、広義には、個人的な判断や認識を表す用語として理解することができる。この理解における「個人的な」という限定は、概ね「複数の個人による共有を前提にしていない」ことを意味する。たとえば (22) は、話者の主観を表明した発話として解釈することができる。この発話は、他者が同じ判断や認識を共有していることを前提にした発話ではないからである。

(22) *Je crois que je ne me marierai jamais.* (Georges Simenon, *Le Petit Saint*, Collection Le Livre de Poche, 1964, p.188)

(23) *La Terre est ronde, [...].* (Marc Levy, *Le premier jour*, Collection Pocket, 2009, p.12)

(24) *Il pleut.* (Guillaume Musso, *Que serais-je sans toi ?*, Collection Pocket, 2009, p.18)

客観という用語は、広義には、複数の個人による共有を前提とした判断や認識を表す用語として理解することができる。たとえば (23) や (24) は、客観性にもとづいた発話として解釈することができる。この発話は、他者が同じ判断や認識を共有していることを前提にした発話だからである。客観は、主観の欠如を意味する用語として理解してもよい。

つまり主観と客観は、相互に規定し合う関係をもった概念である。客観は、主観の欠如を意味する。そして主観は、客観の欠如を意味する。

(25) *Il commence à pleuvoir.* (Agnès Abécassis, *Chouette, une ride !*, Collection Le Livre de Poche, 2009, p.209)

したがって主観と客観の弁別は、主観と客観の相互依存性に立脚すると言ってよい。主観が成立しないところでは、主観と客観の弁別も成立しない (3.3.2 を参照)。よって客観も成立しない (3.3.3 を参照)。たとえば (25) の *pleuvoir* においては、主観 (あるいは、判断や認識が主観によること) を表現すること

ができない。この動詞形が、不定詞の動詞形だからである。よって *pleuvoir* においては、主観と客観の弁別が成立しない。客観（あるいは、判断や認識が主観によらないこと）を表現することもできない。(25)において客観の表現としての解釈ができるのは *pleuvoir* ではなく、*il commence à pleuvoir* という発話の全体である。

3.2 モダリティと主観性の表現

モダリティという用語は、発話の命題的内容に対する話者の判断を言語表現化したものを意味する。たとえば (26) における *devraient* という動詞形には、モダリティが含まれると言うことができる(2.2.2を参照)。この動詞形によって、発話の命題的内容が話者自身の見解でないことが暗示されているからである。

- (26) *Selon cet utopiste, les hommes devraient vivre en petites communautés de mille six cents à mille huit cents membres.*
(Bernard Werber, *L'Encyclopédie du savoir relatif et absolu*,
Collection Le Livre de Poche, 2000, p.93)

よってモダリティは、主観性の表明でもあると考えられる。主観という用語は、個人的な判断や認識を表す用語だからである(3.1を参照)。たとえば (26) においては、*devraient* という動詞形によって、発話の命題的内容が話者自身の見解ではないという主観性が表現されていると言ってよい。

- (27) *J'ai honte de moi.* (Cécile Krug, *Demain matin si tout va bien*,
Collection J'ai lu, 2004, p.118)
- (28) *Une femme. Elle me plaît.* (Brigitte Aubert, *Transfixions*, Collection
Points, 1998, p.83)
- (29) *Mathilde me gêne quand elle a bu.* (Fred Vargas, *L'homme aux cercles bleus*,
Collection J'ai lu, 1996, p.116)

ただし主観性の表現が、モダリティであるとはかぎらない。たとえば (27)

の *j'ai honte ...*, (28) の *elle me plaît*, (29) の *Mathilde me gêne ...*はそれぞれ、主観を表現したものと考えられる。これらが、他者が同じ判断や認識を共有していることを前提にした発話ではないからである (3.1 を参照)。しかし、これらの発話にモダリティが含まれているとは言えない。モダリティは、命題的内容に対する話者の判断を言語表現化したものだからである (2.2.2 を参照)。ようするに (27) の *j'ai honte ...*, (28) の *elle me plaît*, (29) の *Mathilde me gêne ...*においては、発話の命題的内容そのものが主観にもとづいた内容なのである。命題的内容に対する話者の判断が表現されているわけではない。

したがって、モダリティは主観を表現する手段の一部分だと言ってよい。ある表現がモダリティであれば、その表現は主観を表現したものである。ただし主観が表現されたからといって、その表現がモダリティであるとはかぎらない。

3.3 接続法的動詞形における主観性と客観性の弱化

3.3.1 接続法的動詞形における主観性の弱化

接続法的動詞形には、モダリティを表現する表意単位の実現形は含まれない。接続法的動詞形という用語は、接続法の動詞形の使用が規範とされる文脈に現れる動詞形を意味する (2.2.1 を参照)。接続法的動詞形においては、モダリティを表現し、かつ表意単位の実現形としての必要条件をみたすような切片は含まれていない (2.2.3 と 2.2.4 を参照)。たとえば (30) における *parte* という動詞形には、モダリティを表現するような表意単位の実現形は含まれていないと言ってよい。

(30) Hélas ! il faut que je *parte*, à présent. (Françoise Sagan, *Aimez-vous Brahms...*, Collection Pocket, 1959, p.45)

(31) Je veux que les choses *soient* faites dans les règles !! (Philippe Djian, *37°2 le matin*, Collection J'ai lu, 1985, p.72)

したがって接続法的動詞形においては、主観性が弱化すると考えられる。接

統法的動詞形に、モダリティを表現する表意単位の実現形が含まれないからである。モダリティは、主観を表現する手段のひとつである（3.2を参照）。よってモダリティを表現する表意単位を活用できないという点で、接続法的動詞形における主観性は弱化していることになる。接続法的動詞形の使用は、文脈的な制約に立脚するからである（2.2.1を参照）。文脈的な制約に従うことは、モダリティではない（2.2.3を参照）。たとえば（31）の *soient* は、話者の主観を表現するために選択された動詞形ではない。この *soient* においては、話者の主観を表現することは難しい。

3.3.2 接続法的動詞形における主観と客観の弁別の弱化

接続法的動詞形においては、主観性が弱化する。接続法的動詞形という用語は、接続法の動詞形の使用が規範とされる文脈に現れる動詞形を意味する。モダリティを表現する表意単位を活用できないという意味で、接続法的動詞形における主観性は弱化していると考えられる（3.3.1を参照）。たとえば（32）の *soit* は、主観を表現するために選ばれた動詞形ではない。この選択は、いわば単なる規範だからである（2.2.1を参照）。

(32) Je ne crois pas que ce *soit* une bonne idée. (Guillaume Musso, *Parce que je t'aime*, Collection Pocket, 2007, p.167)

(33) Quoi que je *fasse*, les choses m'échappaient. (Éric Faye, *Nagasaki*, Collection J'ai lu, 2010, p.94)

したがって接続法的動詞形においては、主観と客観の弁別が弱化すると考えられる。接続法的動詞形においては、主観性が弱化するからである。主観と客観の弁別は、主観と客観の相互依存性に立脚する。主観が成立しないところでは、主観と客観の弁別も成立しない（3.1を参照）。よって主観性が弱化するところでは、主観と客観の弁別もまた弱化することになる。たとえば（33）の *fasse* にあっては、主観と客観を弁別することは難しい。この *fasse* という動

詞形によって表現されているのは、主観でもなければ客観でもない。

3.3.3 接続法的動詞形における客観性の弱化

接続法的動詞形においては、主観と客観の弁別が弱化する。接続法的動詞形という用語は、接続法の動詞形の使用が規範とされる文脈に現れる動詞形を意味する。主観性が弱化するところでは、主観と客観の弁別もまた弱化することになる（3.3.2を参照）。たとえば（34）の *sois* は、主観を表現するために選ばれた動詞形でもなければ客観を表現するために選ばれた動詞形でもない。この選択は、いわば単なる規範だからである（2.2.1を参照）。

(34) Je suis contente que tu *sois* là... (Anna Galvalda, *Ensemble, c'est tout*, Collection J'ai lu, 2004, p.302)

(35) Mange avant que ça ne *refroidisse*. (Fred Vargas, *Un lieu incertain*, Collection J'ai lu, 2008, p.256)

したがって接続法的動詞形においては、客観性が弱化すると考えられる。接続法的動詞形においては、主観と客観の弁別が弱化するからである。主観と客観の弁別が弱化するところでは、客観性もまた弱化することになる（3.1を参照）。たとえば（35）の *refroidisse* は、客観性を表現するために選択された動詞形ではない。この *refroidisse* にあっては、客観性を表現することは難しい。この動詞形によって表現されているのは、主観でもなければ客観でもないからである。

4. まとめ

動詞形として、いわゆる接続法の動詞形を使用することが規範となっている文脈がある。たとえば（36）や（37）における従属節が、それにあたる。つまり（36）や（37）の従属節では、接続法の動詞形を使用することが規範である。

(36) Il faut que je *dorme* un peu. (Sébastien Japrisot, *L'été meurtrier*,

Collection Folio, 1977, p.274)

(37) Tu veux que je *dorme* chez toi ce soir ? (Sylvie Testud, *Le Ciel t'aidera*, Collection Le Livre de Poche, 2005, p.41)

接続法の動詞形の使用が規範とされる動詞形においては、主観性の弱化が生じる。動詞形に、モダリティを表現する表意単位の実現形が含まれないからである。モダリティは、主観を表現する手段のひとつである。よってモダリティを表現する表意単位を活用できないという点で、接続法の動詞形の使用が規範の動詞形における主観性は、弱化していることになる。実際（36）や（37）の *dorme* は、話者の主観を表現するために選択された動詞形ではない。

このような動詞形においては、主観と客観の弁別も弱化する。主観と客観の弁別は、主観と客観の相互依存性に基盤がある。主観が成立しない文脈では、主観と客観の弁別も成立しない。よって主観性が弱化する文脈では、主観と客観の弁別もまた弱化することになる。実際（36）や（37）の *dorme* には、主観と客観の弁別がない。

したがって、接続法の動詞形であることが規範となる動詞形では、客観性も弱化すると考えられる。このタイプの動詞形においては、主観と客観の弁別が弱化するからである。主観と客観の弁別が弱化する文脈では、客観性もまた弱化することになる。実際（36）や（37）の *dorme* は、事態の客観性を表現するために選択された動詞形ではない。

文脈的な制約に従うことは、主観でもなければ客観でもない。主観と客観の弁別は、主観と客観の相互依存性に立脚するからである。主観が成立しない文脈では、主観と客観の弁別も成立しない。よって客観も成立しない。文脈的な制約においては、主観と客観の弁別は意味をもたないと言ってよい。

参考文献

川島浩一郎（2012）「接続法と命令法に関する一考察」『福岡大学人文論叢』44（1）、255-

268.

川島浩一郎 (2013) 「叙法としての単純未来」『福岡大学人文論叢』45 (1・2), 87-112.

川島浩一郎 (2014) 「従属節における叙法記号素の対立の解消」『福岡大学人文論叢』46 (2), 263-281.

川島浩一郎 (2015) 「接続法半過去形および接続法大過去形における半過去記号素と単純過去記号素の対立の中和」『福岡大学人文論叢』46 (4), 899-923.

川島浩一郎 (2017) 「接続法の動詞形における叙法記号素の存在と不在 — フランス語教育の観点をまじえて —」『福岡大学言語教育研究センター紀要』16, 29-38.

川島浩一郎 & 渡邊佳奈 (2017) 「初級教科書における接続法現在 — 接続法の用法を表現する諸概念 —」『福岡大学研究部論集』A 17 (1), 113-123.

MARTINET, André (1979), *Grammaire fonctionnelle du français*, CREDIF.

YAMASAKI, Takashi (1966) « Comment on emploie le subjonctif imparfait en proposition subordonnée » 『西南学院大学仏語・仏文学論集』1, 11-19.